着手した。ここにはそのはじめとして、今迄の断片的な採集からマダニ類、トゲダニ類についてとりまとめた成績を、とりあえず予報する。

A. マダニ属：少数ながら今迄採集されたものを、浅沼(1952)に従つて分類すると、幼ダニは3種で、*Ixodes* sp. 2 がアカ及びヒメネズミから福岡、熊本、長崎各県に、*Ixodes* sp. 3 が、アカネズミから福岡、宮崎県に、*Ixodes* sp. 6 が、アカ及びヒメネズミ、ヒミズモグラから福岡、熊本、長崎、宮崎各県に見られた。若ダニは1種だけ、*Ixodes* sp. 54 がアカネズミから福岡、熊本、宮崎各県に見られた。すなわち九州では、*Ixodes* sp. 6 が宿主、分布ともに広く、最も普通にみられる。

B. トゲダニ類：確かに同定できたのは、次の8種である。1) *Laelaps echidninus* 2) *Laelaps jettmari* 3) *Laelaps nuttalli* 4) *Eulaelaps stabularis* 5) *Haemolaelaps glasgowi* 6) *Haemogamasus japonicus* 7) *Haemogamasus quadrisetatus* 8) *Hirstionyssus carnifex*. 寄主についてみると、アカネズミからは、8種すべて見出され、ヒメネズミには2) 4) 6) 8) が、ヒミズモグラには、7) 8) 9) が、ドブネズミには、1) 3) 8) が見られた。7) はアカネズミとヒミズモグラから少数見られ、九州地方にも分布することが示された。2) は圧倒的優先種で、各地ともアカネズミに多数見出される。寄生期については、浅沼により1)~5) は親ダニ、第II、第I若ダニ各期で、6) 7) は親、第II若ダニ期で、8) は親、第I若ダニ期で見出されているが、今回の成績では、4) は雌雄親ダニ、1) 4) 5) 8) は雌親ダニのみが見出された。これは採集が断片的に行われたためではないかと思われる、季節的消長については、各期別の寄生性の差異、巢内相の問題など要因が複雑で、たやすく論じ難いが、とにかく熊本県水俣地方を中心とした地方で、毎月1~2回採集したアカネズミ1頭平均附着数の月別変動をみると、6月から著しく増加し、7月最高に達し8月まで続き、9月著しく減少、10月少し増加して以後急速に減少し2月最低に達している。これは親ダニ、第II、第I若ダニ各期ともほぼ一致した傾向であつた。(九大・寄生虫)

野兎病感染源動物の寄生マダニ類

浅沼 靖 大原嘗一郎 櫻井 信夫
中川 宏 後藤 尚徳 佐藤 信

Asanuma, K., Ohara, S., Sakurai, N.,
Nakagawa, H., Goto, A. & Sato, T.:
Studies on ticks infesting source animals
of Yato-byo or tularemia in Japan

野兎病感染源として最も重要な動物が野兎であることは、よく知られているが、最近、ツキノワグマ、リス、キジ、コウライキジ、犬などによる感染例も報告されるようになった。これら動物間の感染は、いうまでもなく接触あるいは、それに似た経路によるであろうことは予想に難くないが、一方、ダニが役割を果している場合も考えられる〔大原(八)(1935)本邦の動物界における野兎病の研究〕。そこで演者らは、以上の感染源動物に、どのようなダニが寄生しているかということを知るために福島、千葉、静岡、秋田、山梨などの野兎病汚染地あるいは、その近接地において、調査を行い、ほどそのあらしを知ることができた。

野兎(142例)では、各調査地を通じて、*Haemaphysalis flava* が圧倒的に多く、他に少数の *Ixodes* 属のダニを認めたが〔両者の個体数間の割合は、97.63対2.37という値が出ている。なお、野兎には恙虫類の寄生も多いが、これについては、浅沼など(1955)兎寄生の恙虫類、資源研彙、39を参照されたい〕、リス(14例)でも、同様、ツキノワグマは例数が少ないが(1例)、多数の *H. flava* に加えて *Dermacentor auratus* がみられた。キジ、コウライキジ(13例)では、*H. flava* がやはり圧倒的に多く、*Ixodes* 属の少数が認められる程度。犬では *Haemaphysalis campanulata*, *H. bispinosa* の寄生が一部認められたが、大部分は、野兎と共通する *H. flava* 及び *Ixodes japonensis* であつた。

以上のように、野兎病感染源動物のうち重要な野兎では *H. flava* の寄生が各地を通じて普遍的に認められ、又他の感染源動物でも同様な傾向があり、ともかく *H. flava* が、主な寄生者であると結論された。たゞ、注目すべきことは、周年観察の場合、野兎では、幼若親だに期の各期が季節的变化を明らかに示すに反し、キジ、コウライキジ、リスなどでは寄生者の大部分が幼若期のみに限ぎられていることで、これは、演者らが、かつて指摘したこと〔浅沼など(1955) *Haemaphysalis flava* の日本における寄主と分布。資源研彙、37.〕をさらに裏付けるようである。(資源研、大原病院)